



梓川地区から参加の新成人の皆さん



成人式テーマ 『ペイント ～自分色に～』

松本市成人式が1月13日(日)に、市総合体育館で開かれました。新成人が振り袖姿やスーツで出席し、各団体の代表者から二十歳の門出を祝福されながら、大人の仲間入りをしました。菅谷昭市長は式辞で、パプロ・ピカソを引用、草間彌生展の赤、松本山雅の緑など昨年を象徴するカラーを紹介しながら、今年のテーマ「ペイント～自分色に～」につなげ、新成人に「一人一人が時代に流されず、勇気ある行動で、知的な自分色の大きな花を咲かせて欲しい」と激励し、会場内は、人の話に耳を傾ける大人の落ち着いた雰囲気がありました。式典後に記念撮影が行われ、新成人



梓川中学校サッカー部、新人戦で大活躍！
「県大会準優勝」「北信越中学校新人フェス出場」

昨秋に行われた新人戦では、松本市中大会・中信大会とともに1位で通過し、第17回チラベルトカップ県中学校新人サッカー選抜大会に出場しました。県大会も順調に勝ち進み、迎えた決勝の対戦相手は、市中大の決勝で対戦した信大附属松本中でした。市中大では、2対1で梓川中が勝ちました。が、リベンジに燃える附属中の気迫に押され

私たちは中学時代の恩師を囲み、それぞれ近況を報告しあったり、一緒に写真を撮ったりと再会を楽しんでいました。新成人の西村向陽さん(北大妻)は「人生の節目なので、成人として責任の取れる大人になりたい」と力強く話してくれました。

結果は惜しくも準優勝でした。その後、北信越5県の各県大会上位チームが出場できる北信越大会に出場しました。各県の強豪20チームが集まった中、この大会準優勝の金津中(福井県代表)、3位の星稜中(石川県代表)と対戦できました。試合は負けてしまいました。が、自チームの課題とストロングポイントを確認できた有意義な大会となりました。

選手たちは試合を重ねるごとにたくましくなり、その表情・姿は、今年の夏の大会での大活躍を予感させてくれるものでした。



活動の成果発表 第34回梓川文化祭 〜梓秋祭〜

文化・芸術の秋に合わせ、恒例の梓川文化祭が開催されました。美術展は11月7日(水)から11日(日)までアカデミア館にて、芸能祭・音楽祭は11月11日(日)に梓川公民館と梓川福祉センターを会場に行われ、地域住民の交流が深まる一大イベントとなりました。

美術展では地区内で活動する11のグループによる書道、写真、短歌、絵画、彫刻、生け花、手芸など、約180点の作品が展示されました。どの作品も個性にあふれ、感性豊かに表現され、作者の力強さや繊細さを感じました。一



つ一つがとても丁寧で美しく、作り手の心が感じられる作品に仕上がっており、来場された方を魅了しました。

芸能祭ではダンス、バンド、オーケストラなどの7団体が出演し、日頃の練習や活動の成果を存分に発揮されました。曲が終わるごとに会場からは大きな拍手が沸き起り、盛り上がりを見せました。音楽祭では4団体の歌声が披露され、馴染みのある有名な歌から地域の風景を思わせる歌まで、レパートリーに富んだ演目と、澄んだ歌声に会場全体が聞き入っていました。締め



くくりは会場の皆さんと一緒に信濃の国を合唱し、芸能祭・音楽祭の全演目が幕を閉じました。秋晴れに恵まれた屋外では緊急車両の乗車体験と撮影会が行われ、普段近所で見たり、触れたりすることのできない消防車やパトカーと写真を撮ったり、運転席に座らせてもらうことができました。また、三重県御浜町のみかんが販売され、大勢の地域住民が買い求めていました。



岩岡町会そば会

12月1日(土)に「岩岡農家組合そば打ち講習会」が開催され、小学生やPTA、ボランティアなど、約50名の方が参加しました。そば会で使うそば粉は、岩岡町会内で作っている方から譲っていただいた粉を使用しました。

一つの伸し台に子供が3人ずつ6箇所に分かれ、大人の指導のもと、子供たち中心に、そばを練ったり、伸ばしたり、切ったりしました。子供たちは「自ら打ったそばは格別美味しい」と言いながら、作り立てのそばを味わいました。

そば会は、岩岡町会の恒例行事として、毎年12月に開催しており、そば会をきっかけに、各家庭でもそば打ちを楽しんでいるそうです。



和太鼓体験教室

12月2日、9日、16日に、梓川公民館主催の「和太鼓体験教室」が開催され、小学生を中心に7名が参加し、講師には、地区内で活動している梓川太鼓十八会の会員が指導にあたりました。初日には基本打ちですら、ままたまなかつた参加者でしたが、最終日には「梓川祭りばやし」を丸々一曲演奏できるほどに上達しました。最後に、梓川太鼓十八会による「一番太鼓」が披露され、迫力ある演奏と巧みな技術で、参加者を魅了していました。

梓川太鼓十八会の上嶋弘明代表は「参加者の中から、将来、梓川太鼓を担う方が育ってほしい」と話し、梓川太鼓が継承されていくことを願っていました。

